

[02]韓国研究センター年報

<https://hdl.handle.net/2324/2198487>

出版情報：韓国研究センター年報. 2, 2002-03-15. Research Center for Korean Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

symposium

シンポジウム 2 韓国考古学の新世紀

シンポジウム「韓国考古学の新世紀」は、韓国国際交流財団による日韓シンポジウム助成事業の2001年度プログラムとして、2002年2月23日に九州大学国際ホールで開催され、約300名の参加を得た。韓国研究センターならびに九州大学大学院人文科学研究院の共催であった。

韓国考古学は、戦前の日本帝国主義の植民地支配をもとに日本人研究者によって始まっている。解放後は朝鮮民族自らの手で研究が進められ、20世紀後半には韓国考古学は飛躍的な発展があった。しかし、韓半島は大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国に南北が分断されているため、異なる国家体制によって民族観の違いから考古学的な解釈が異なる場合もみられる。また、相互の交流もままならないのが現状であろう。このような韓国考古学の現時点における学問的到達点を明らかにし、その問題点と今後の展望を指摘することにより、21世紀という新世紀における韓国考古学の未来を語り合うことに本シンポジウムの目的がある。韓国考古学は現在ますます細分化され、個々の分野における専門性が強化されている。そこで、本シンポジウムは新石器時代から三国時代に限り、それぞれの分野における韓国考古学界の第一人者5名を招聘した。すなわち、新石器時代はソウル大学校人文大学の任孝宰教授、青銅器時代（無文土器時代）は慶北大学校人文大学李白圭教授、百濟文化は韓国精神文化研究院姜仁求教授、加耶文化は釜山大学校人文大学申敬澈教授、新羅文化は慶北大学校尹容鎮名誉教授にお願いした。また、これら5名の講師の方々は、九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室とも古くから深い関係にある。それらの発表内容は、任孝宰「韓国新石器時代研究史」、李白圭「韓国無文土器研究の現状と課題」、姜仁求「百濟王陵の被葬者推定－宋山里と陵山里の古墳群を中心に－」、申敬澈「加耶の古墳－加耶出土の土器系土器と初期須恵器の問題－」、尹容鎮「新羅古墳文化」であった。最後に、これらの発表をふまえ、九州大学大学院人文科学研究院西谷正教授が総括を行った。

